



 Data	2022-39
監督:	レオス・カラックス
原案・音楽:	スパークス
出演:	アダム・ドライバー/マリオン・コティヤール/サイモン・ヘルバーク/デヴィン・マクドウェル/ラッセル・マイル/ロン・メール

👁️👁️ みどころ

私は唯一無二の監督“レオス・カラックス”も、ロンとラッセルというメール兄弟による“スパークス”も知らなかった。また、本作の謳い文句、“ダークファンタジー・ロック・オペラ”って一体ナニ？『エディット・ピアフ 愛の讃歌』（07年）で美しい歌声を披露したフランス人女優マリオン・コティヤールはわかるが、『ハウス・オブ・グッチ』（21年）で“三代目”役を熱演したアダム・ドライバーの歌や踊りは如何に？

『レ・ミゼラブル』（12年）では少女コゼットの物語が涙を誘ったが、2人の間に生まれた女の子“アネット”が歌う子守歌の美しさと不気味さは？

『ウエスト・サイド物語』（61年）の登場にも驚いたが、本作の登場にもビックリ！あれこれと難解だから、本作の面白さを理解するにはあれこれの勉強が不可欠。それをお忘れなく！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■レオス・カラックスとは？スパークスとは？■□■

本作を監督したレオス・カラックスは、チラシによれば「同じことを繰り返さず、後にも先にも似た作家のいない“唯一無二”の監督」で、「作品数こそ少ないが、早くから現代映画の重要な作家と目されてきた」らしい。知らなかったなあ。パンフに載っている彼の過去の作品も、知らないものばかりだ。

また、これも私は全く知らなかったが、本作の原案と音楽を担当したのは、ロンとラッセルというメール兄弟によるスパークス。彼らはポップスの革新的パイオニアで、「50年におよぶそのキャリアにおいて、まるで完璧なお手本かのごとく常に興味をそそる存在であり続けてきた。1972年のデビュー以来、世界的に高い評価を得るスパークスは、独創的で大胆な25枚のアルバムをリリースしている。」らしい。パンフレットに詳しく紹介

されているので、興味のある人はしっかり確認！

■□■こりゃ傑作！ダークファンタジー・ロック・オペラ！■□■

門脇妻は今や押しも押されもせぬ若手を代表する大女優になっているが、オーディションによってヒロインに抜擢されたデビュー作たる『愛の大渦』（14年）（『シネマ32』未掲載）では、「地味で真面目そうな容姿ながら、誰よりも性欲が強い女子大生」の女をチョー過激に演じていたからビックリ！

他方、本作のチランには、2人の主人公が大嵐の海の上でダンスをしているダイナミックな姿が映し出され、「愛の大渦に呑み込まれる、ダークファンタジー・ロック・オペラ！唯一無二の監督カラックスのとてつもない傑作！！」と書かれている。しかし、“愛の大渦”って一体ナニ？

私が中学生の時に観た『ウエスト・サイド物語』（61年）では冒頭のシークエンスに衝撃を受けたが、それは本作も同じ。そもそも、歌いながら行進するなどというシーンが日常生活に登場することはまずないが、ミュージカルならそれもあり？『ハウス・オブ・グッチ』（21年）で“華麗な一族”名門グッチ家の三代目役を繊細かつ大胆に怪演していた名優アダム・ドライバーは、本作導入部では攻撃的なユーモアセンスを持ったスタンダップ・コメディアン、ヘンリー・マクヘンリー役として、あっと驚く“悪態”の数々を見せるので、それに注目！

他方、女優マリオン・コティヤールは、第80回アカデミー賞主演女優賞等を受賞した『エディット・ピアフ 愛の讃歌』（07年）（『シネマ16』88頁）で素晴らしい歌声を披露したフランス最高の女優だが、本作でも、冒頭から大成功を収めているオペラ歌手アン・ドゥフラヌー役として素晴らしい歌声を披露するので、それに注目。ちなみに、前述したチランの写真は本作中盤のハイライトシーンで登場するので、そのスリリングな展開にも注目！

■□■恋・結婚・出産！絶頂からどん底へ！■□■

『ウエスト・サイド物語』も『サウンド・オブ・ミュージック』（65年）も素晴らしいミュージカル映画だったが、通常の劇映画の感覚で言えば、そもそもミュージカルは変な映画、変な芸術。それは本作も同じで、本作前半は主にスタンダップ・コメディアンたるヘンリーの超過激な舞台での演出を中心に物語が進行していく。そして、そんなヘンリーは国際的なオペラ歌手アン・ドゥフラヌーとの恋と結婚、娘のアネット誕生に繋がっていくから、万事順調、順風満帆だ。

そう思っていたが、ある日のラスベガスの舞台でヘンリーがやらかした悪態や不快なジョークが不評を買うと、この手の芸人の没落は早い。ところが、そんな事態を容易に受け入れられないヘンリーは、アンの変わらぬ名声に嫉妬した挙げ句、ある企みを。それは、表面上は2人の関係の修復のため、自家用のヨットで自由な旅に出ようというものだったが、大嵐の夜、酔っぱらったヘンリーが嫌がるアンと無理やりワルツを踊っている最中に、

指揮者はアネットを金目当ての見せ物にすることに異議を唱えたが、結局は強引なヘンリーに従うことに。世界ツアーが始まると、“ベビー・アネット”はたちまち世界中の人気者になったが、なぜかヘンリーは不安の原因に悩まされ、酒に溺れていくことに。さらにある日、指揮者にアネットを預け、飲み歩いたヘンリーが家に帰ると、アネットがアンとヘンリーの歌、『深く愛し合う二人』を歌っていたからビックリ。なぜ教えたのか問い詰めると、指揮者は、なんと「アネットの本当の父親は私だ」と言い始めたからアレレ……。その結果、ヘンリーは“第二の殺人”を犯してしまったが、それを目撃していたのがアネットだ。

そんな事態を受けてヘンリーはアネットの公演停止を発表し、ハイパーボウルのハーフタイムショーでベビー・アネットの最後の公演を行うことに。ものすごい盛り上がりの中でベビー・アネットが登場したが、なぜか彼女は歌うことを拒否し、満員のスタジアムで「パパは人殺しよ！」と告げたから、さあ、大変だ。

■□■ラストは裁判劇に？否！否！父娘の和解は？■□■

大観衆の前にして、アネットが殺人犯の告発をしたことによってヘンリーが殺人罪の裁判にかけられると、本作ラストは想定外の法廷劇に……。？弁護士のは、「法廷モノ」の映画評論が得意中の得意だから、そうなると私の出番に？いやいや、「ダークファンタジー・ロック・オペラ」たる本作で、それはないはずだ。

考えてみれば、スタンダップ・コメディアンたるヘンリーの超過激な舞台から始まった本作は、レオス・カラックス監督の演出とスパークスの音楽が相まって、スリリングなストーリーが連続してきた。その中には、アンの殺人劇や指揮者の殺人劇という陰惨な事件もあったが、アンの美しい声を受け継いだ女の子アネットの大活躍が、本作後半からは最大のテーマになっていく。彼女が大観衆の前で歌う哀愁のこもった子守歌は耳に残る名曲だが、アネットが人間の女の子でなく、操り人形の女の子であるところが本作のミソだ。もちろん、そんな想定は現実にはあり得ないし、馬鹿げたストーリーだが、ダークファンタジー・ロック・オペラたる本作では、それが全編を貫くポイントになっている。

しかして、本作ラストは、裁判から数年後、刑務所にいるヘンリーと、そこを訪れたアネットとの“父娘の対話”になるから、そこで涙の和解が成立！そう思っていたが、いやいや、そこでもアネットは和解を拒み、身勝手に自分を利用したヘンリーを非難したから、ビックリ。そんなアネットに対し、ヘンリーはいかなる対応を？そんな本作の意外な結末は、あなた自身の目でしっかりと。

2022（令和4）年4月14日記